

## 樹木医の見た雲南の暮らし

日本樹木医会愛知県支部 渡邊 裕之

中国は広い。中部国際空港から上海まで飛行機で 2 時間半、上海で国内航空に乗り換えて雲南省の昆明まで 3 時間余、名古屋～上海間より上海～昆明間を飛んでる距離の方が長い。中国の広さは日本の約 26 倍、雲南省だけでも 38 万 k m<sup>2</sup>と日本全土より広い。

今回、雲南懇話会「第 7 回 Field Work」10 名の団員の 1 員として、2009 年 11 月 2 日から 15 日までの 14 日間、雲南省の南部に住む少数民族を訪ねる旅に参加したので、私見を交えての見聞記を以下に記します。

私は海外への渡航経験も少なく、ましてや広い広い中国の辺境の一部を垣間見ただけなので、多くの誤解や知識不足、観察不足等による偏った記述が多々あると思われます。遠慮なくご指摘、ご批判いただければ幸いです。

### 1. 古代・滇の国

昆明市に着いた翌朝、雲南省博物館に行く。中国の公共建築物は概して壮大でドデカイものが多い。

この博物館も、前面に 10 余本の太い円柱を構えた堂々たる白亜の建造物である。

中に入ると青銅器製の数々の生活用器具や装飾品、武器、楽器、祭祀用具から建物に至るまで、実に多種多様なものが展示されている。そのいずれもが、実に精巧でリアル且つ躍動感に富んだ姿態と表情で、本当に紀元前 4～500 年も前に作られたものかと驚嘆させられた。装飾品や祭祀用具もさることながら、これらの器具を持って神々や首長に仕える人々の身のこなし、踊る姿の生々しさ…。中でも牛や虎、豹、猪、水鳥など動物の一瞬の動きや命を賭けて戦う様など、実に恐るべき表現力に溢れた器物の数々を目の当たりにして、これが 2000 年以上も前の人間が作ったものかとただ脱帽するのみ。

他方、農耕に従事して首長に仕える奴隷や祭りで生贄とされる他種族？の人、戦いで首を刎ねられる人々など、文字で表わされた記録以上に当時の奴隷制社会の実態を如実に表わす展示品も数々ある。

これ等の品々は、1950 年代以降に雲南省各地の墳墓等から掘り出されたものである。権力者に捧げられた埋葬品は、当時の最先端の技術と職人と富を結集して作られた工芸品で、権力の象徴のようなものであろう。その多種多様さと物量に圧倒される。

中国の歴史は長くて深い。夏？、殷、周を経て南方の一蛮族と云われた滇（てん）の国が歴史に現れるのは千余年も経った戦国時代からであろう。

先進地の高度な文化・文物は、いつの世でも後進地の人々を惹きつけて止まない。殷、周の優れた獣面紋様の青銅器文化が千年後に 2 千 k m 近く離れた南蛮の地にも受け継がれたのだ。

中原から見れば一蛮族であっても、これだけ優れた青銅器の数々を作り得る技術と富力、それを支え生産しうる人口と社会組織を持っていたのだ。

当時の日本なんぞは青銅器も鉄器も知らず、石器や木器・土器を手に野山をうろついて堅穴住居に住む縄文時代で、勿論、中国の正史に名も出てこない名も無き東海の蛮族にすぎなかったのだ。

余談ながら、中国の春秋・戦国時代から千年近く経った隋・唐時代には 2 千 k m 以上離れた東海の倭の国から、命を賭して都の洛陽や長安を目指す隋・唐詣うでが始まっている。

さらに千余年後には、鎖国をやめて文明開化の掛け声とともに、地球を半周するほど遠くのヨーロッパ諸国へ多くの日本人が出かけてその文明の彼我の格差に驚嘆している。高度な文化・文物が人々を惹きつける魅力は昔も



今も変わらない。たとえ、戦火を交えた敵国であっても戦後、超大国のアメリカの文明や先端技術に多くの若者が惹き寄せられて、その時々的事物を追い求めるのもむべなるかなである。

## 2. 少数民族

中国には漢族以外に 55 の少数民族が居ると言われ、雲南省には少数民族の人口の約 3 分の 1、25 種族が住んでいると言う。少数民族とは言え、チワン族・1550 万人、ミャオ族・740 万人、イ族・700 万人、ヤオ族・215 万人などと数十万人単位の人口がある民族も多い。

これら少数民族の衣装や民具、生活用品などもこの民族博物館で展示しているので手っ取り早く知ることができる。また、この博物館の道の向かい側には、これら少数民族の伝統的家屋や文化、風俗などを展示、紹介する広いテーマパークがある。博物館内やテーマパークの園内を巡ると、日本人に酷似した顔の人達や日本の衣装、民具、生活用品などとそっくりな物に出会って親近感を覚え、日本人のルーツが照葉樹林帯のこの付近ではないかとの思いがますます深まってくる。中国の人口は 13 億 5 千万人。



サニ族の女性

少数民族とは云え人口 1 千万人を越すチワン族、満州族をはじめ数百万人単位の民族が数多くある。

中には広西チワン族、新疆ウイグル族、チベット族、内モンゴル族などのように自治区を形成する民族もあって世界一の多民族国家である。一口に各民族の自決・共存共栄といっても、動物たる人類の潜在的本能として越え難い人種の壁がなにかと浮出やすい。また、日常生活を律する信仰や宗教が壁となることも多い。

アメリカは移民が寄り集まった多人種国家でやや性格を異にするが、中近東地区や東欧・バルカン地区には多くの人種が混在していて、数百年来何かともめ事が絶えない。多くの民族がひしめくヨーロッパは現在 EU 連合を結成して、行く行くは国家連合も目指す？ 壮大な試みを実験中であり、今後の動向が注目される。

中国は今、チベット問題を抱えるなど、多民族国家をまとめる舵取りは実にむずかしいものがある。

## 3. 耕して天に至る

バスで紅河の本流を渡って南へ向かい、山又山を越えて元陽県のハニ族の村を目指す。平野は無く、各谷間の至る所に大小の棚田が見えてくる。標高約 1800m 前後の山の斜面を切り拓いた一大棚田が出現する。下から眺めるとまさしく「耕して天に至る」の景観で、信州・姨捨の「田毎の月」の比ではない。付近の棚田の各一枚は大小あるが、小は巾 1 m、長さ 2~3m、文字どおり水牛の腹の下に隠れるほど小さなものもある。元陽の棚田は、今は観光名所として手入れが



観光用に水を張った棚田・撮影 金子稔

され、朝日・夕日の照り輝きを演出するために、刈取り後の田んぼに水を張っているが、途中の棚田では耕作放棄したらしい小さな田んぼがいくつも散見された。ハニ族をはじめ少数民族の多くは、かつてはもっと北方に住んでいたが、漢族に圧迫されて豊かな平地を追われ、次第に山間僻地に移り住むようになったと云われる。このような山間僻地は、かつては焼畑農業が主体だったと思われる。一般に谷間は日当たりが悪く暮し難いが、山頂近くの台地上なら日当たりも良く、空気が爽やかで種々の衛生害虫も少なく却って暮しやすいと見えて、このような場所を選んで村々が点在している。殆どの物を自給自足していた昔は、現代人ほどには交通の不便さを余り意に介さず、物質的には貧しくても、心豊かに暮していたのであろう。

しかし、米食に対する渴望だけは止み難く、僅かな水を求めて何世代にも渉って営々と山腹を削って、天にも至らんほどの棚田を築いてきた人間の営みには、ただ脱帽あるのみ。

乏しい水を上の棚田から下の棚田へと順送りに田越しに流して利用するだけでなく、森林の少ない中国ではめず

らしく、水源を育む棚田上部の樹林を入山禁止・禁伐の森として大切に保護保存してきたと云う。遠望すると原生林ではなく、二次的な自然林であろう。でも、日本の竹林等で荒れ果てたり、クズに覆われて枯死寸前の里山とは大違いである。ただ、米食に対する渴望は日本でも同じで、暖温帯産の米の品種改良を、国を挙げて明治以来営々と続けて、昨今では北海道旭川地方が米の一大産地となっている。

#### 4. トウガラシの食文化

トウガラシには辛いもの、辛くないもの、色・形も様々で、害虫が少なく、暖地なら周年でも栽培しやすく、保存しやすく、消化吸収を助け、防虫・薬用効果もある等々優れたものの野菜である。原産地はメキシコなどの中南米と云われている。インドの胡椒入手を目指したコロンブスが、胡椒の一種と間違えて持ち帰ったため、**red pepper** とも呼ばれているが、肉の腐敗防止、各種料理の優れた味付け効果等のため、瞬く間に世界各地に広まった。食文化はその土地土地の気候風土、産物を基に親から子へと何世代にも亘って受け継がれる可成り保守的なものである。

中国でも各地の地方料理、民族料理が数多くあるが、トウガラシと油を使わない料理は数少ない。これでもかど赤くなるほどトウガラシをぶち込んだ料理が出てくると、辛いものに弱い者は辟易し、箸が進まない。

トウガラシは中国全土は勿論、東アジア、東南アジアも席捲しながら全世界にまで広まったようで、数百年を経ずして各国、各民族の食文化の味を激変させて、今や民族料理の隠し味の主役にまでなっていると言うのはやや云い過ぎかな…。

雲南を含むこの地方の照葉樹林帯が原産地の「お茶」が、交易商品として馬の背に揺られながら（茶馬古道）遠くチベットやタクラマカン砂漠の果てにまで運ばれた時代に比べると、その伝播速度と広がり方に隔世の感がある。蛇足ながら、雲南はキノコの一大産地である。



奥地の樹林帯では今まで見向きもされなかった「マツタケ」

味付けにはトウガラシが欠かせない！ 撮影：金子稔

は日本人が目の色を変えるので、高値で売れるようになったと言う。当地での「まつたけ料理」は、中国料理の定番通り油でカラカラに揚げられて出されるので、マツタケ特有のほのかな香りと味を賞味するにはほど遠い代物となってしまう。なお、トウモロコシもコロンブスが持ち帰ったと言われ、今では世界各地で栽培されて人類を飢餓から救った重要な穀物となっている。

中国でも、山地に住む少数民族の大切な食料となって、急傾斜地を厭わず山頂近くまで開墾して、トウモロコシ畑がまさに天空に至らん状況の所がある。秋になると家の屋上や軒下などに種々工夫して貯蔵し、民族毎に異なる特徴のある家屋のたたずまいと相俟って独特の農村風景を創出している。

#### 5. きれい感の基準が違う

中国は食の大国である。四つ脚のものは、椅子と机の脚以外は何でも食べちゃうと云われる。

地方の街へ行った時は、市場を覗くとその地方の産物や人々か何を食べているかが手っ取り早く分かる。

中国では朝が早い。早朝薄暗い時から、日本の朝市同様、近在のおかみさん連中？が店開きに余念がない。道端に畳一畳ほどのビニールなどを広げて場所取りをする。ビニールの大きさや場所取りには一定のルールがあるらしく、市場を見廻るお役人と金切り声を上げて言い争うカミサンも居る。売る野菜や肉、ハム、ソーセイジの類も一応それなりに小奇麗にはするが、洗うバケツの水や並べる場所の汚れは余り気にしないようだ。

鶏や兎もその場で殺して湯に漬けて毛をむしり取ってくれる。犬も粗ら毛を取った後、丸のままプロパンのガスバーナーで残り毛を焼いて解体する。場末の街市場に冷蔵庫はないが、さっきまで生きてたものを解体した肉だから新鮮ではあるが、洗う水や使用器具・道具類がきれいとは限らない。

田舎の食堂や飯店を覗くと、お義理にも清潔とは云えない場面に多々出会う。(きれい好きな日本の方々なら、料理する所を見ないほうが幸せであろう。) 「きれいに洗いましたよ」と云っても、彼らの清潔感と日本人の清潔感では尺度の基準が違ふ。一般家庭はなおさらである。豚や水牛、鶏などと寝食を共にしながら、小さな窓で薄暗い台所が料理油の煙で真っ黒に煤けているのを見ると、日本の昔の貧しい農家を見る思いがする。清潔度は貧富差に比例し、生活内容によって異なる。

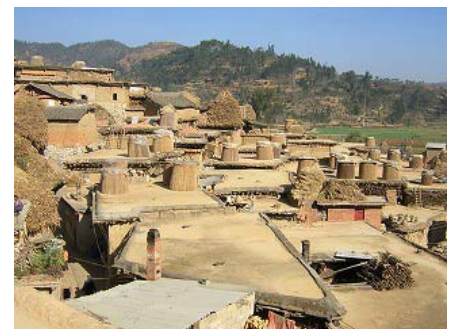
「健康の保持、食の清潔はまずは台所改善から」との運動がかつてあったが、現在の日本では食の安全は当然としても、住居を始め身の回りすべてを無菌状態に近いことを要求する人々が増える傾向にあり、各種の臭い消し、消毒薬などの売上も増えている。各種の細菌類に対する抵抗力や体内での共生機能が衰えると、世界の各地へ出かけた時や災害時には抵抗力の衰えた人達の生存率はどうなるのかと一抹の不安がよぎる。

## 6. なおざりにされる設備保守

中央から遠く離れた雲南省でも人口が約 4000 万人、省内のさらに僻地?の小都市でも幾つもの壮麗な建物や三ツ星、四ツ星のホテルがある。建物、特に公共建築物等は伝統的に非常に大きな構えで、内部の諸施設、調度品等も随分立派なものがある。ホテルも外見は立派で贅沢な造りであっても、洗面台からの排水がパイプを逆流して床上に溢れ出たり、水洗トイレのフロートやシャワーの金具がガタついて機能不全であったり・・・等々と枚挙に暇がない。室内の細部を注視して観ると、作りが粗雑で悪いもの、壊れても修復せずそのまま放置されているもの等が多く、三ツ星、四ツ星のホテルであっても内部の諸設備の機能についてはあまり信用できない。欧米並みにベッドメイキングだけはピシッとやるが、掃除する時に水周りの不備などは分かるはずだと私達は思うが、従業員教育が縦割りか、不徹底か、それともそんなことは意に介さないのか・・・。立派な「箱もの」は造ってもその後の保守点検、運営、サービス、従業員教育などが不十分で、仏作って魂入れずの感がある。建物の外観や使用材料は立派でも、取付け方や細部の造作が雑で、良くぞこれで竣工時の完了検査に合格して〇星マークのホテルの認定をもらったものだと思うのは、我々日本人がきまじめ過ぎるのか。それとも手抜き工事や袖の下で私腹を肥やす輩が絶えない為なのかと勘ぐりたくなる。

## 7. 格差と混沌

最近造られた公共建造物が立派なのは理解できるが、私的建築物にも大きく豪華なものが目につく。省都・昆明の経済発展も数年前に比べて格段の差がある。漢族は昔から商売上手で利に聡いと云われる。省都は勿論、地方都市にも立派なアパートやマンションらしきものの建造が目につき、俄か成金が輩出して経済格差が拡大中なのだろう。観光地や都会の高級飯店、衣料品店などもそれらしき人々で結構賑わっている。それに比べて、山間僻地に暮らす少数民族の暮らしは概して貧しい。



現代の化石村・イ族の城子村

「生きた化石村」と呼ばれるイ族の集落なども、さながら日本の江戸時代並みの生活である。ただ、どの民族の家に行っても今では一台のカラーテレビがあり、大都会の夢のような情景や国内は勿論、世界中のニュースなどを見ることができる。テレビだけではなく。携帯電話の中継所が至る所に建っていて、ケータイが殆ど何処でも通じる状況で、普及スピードにも目を見張るものがある。彼我の生活の現実の格差を目の当たりにしてか、現金収入を求めて都会などへ出稼ぎに行く労働者が 1 億 4000 万人もいると言う。

他方、道路に敷く路盤用の碎石を金槌の手作業で作る労務者が居る傍らで、大型建設機械がうなりを上げて道作りしていることもある。たとえ非効率であっても、人々の働く場を創出するという効用があるとも考えられる。農村では水牛が耕作や荷運びに従事し、急傾斜地のバナナ園では収穫時にはロバが活躍する。地方の村々でも電気器具ならなんでも修理するだけでなく、オートバイから車のエンジンまで分解整備する職人集団が今だに健在

である。

工業製品だけでなく、美術工芸品に至るまで、中国庶民の技術力は底が広く深い。殷・周の青銅器に代表される中国の文化は 5000 年、贗物作りは 4000 年、と時には揶揄（やゆ）されるが、本物と区別が出来がたい物を作るだけの技術力があるのには感服する。また、人工衛星から各種の電子機器類を製造しうる IT 産業に従事する最先端の技術集団が無数にいるであろう。多くの民族と文化の多様さ、庶民生活の経済格差、社会構造の複雑さ等々、現在の広い中国には格差と混沌が満ち満ちているとも云える。

## 8. 日本人は何処から

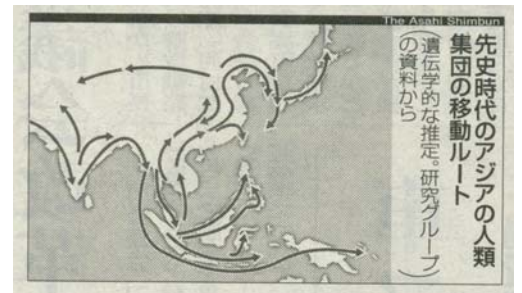
雲南省の 25 の少数民族の内、昆明や大理にもともと住んでいたのはイ族やペー族だと云われ、ハニ族、ナシ族、ミャオ族、ヤオ族、チベット族などは、かつては雲南省から遙か遠くの西北地方や揚子江以南その他に住んでいたらしい。しかし、黄河流域や揚子江付近で勢力を伸ばしてきた漢族が南下する勢力に次第に押しやられて、四川省や雲南省の山間に移り住むようになり、豊かな土地の大部分を漢族が支配するようになったと云う。漢族の主たる勢力が、黄河中流の「中原」に留まっていた間は、揚子江以南は「荊蛮の地」とも呼ばれて、歴代王朝の食指もあまり動かず、この地に住む各民族もそれなりに穏やかに暮していたと思われる。

その後、漢族が膨張するにつれて、他民族を圧迫して覇者となりえたのは何故だろうか。

高度な技術や文明は必然的に地方に流布する。滇の国の青銅器文明は、殷・周に遅れること約千年。その間に「中原」等では青銅器よりも数段も優れた鉄器が大量生産されるようになって、武器はおろか農器具にまで使われるようになった。そのために農業生産が飛躍的に増大して人口が増え、社会の構造・体制も激変する春秋・戦国時代に突入したのは歴史の示すところである。

民族による人種的な能力差は殆どないとも言われる。漢族覇権の遠因は、他民族よりも一歩先んじた優れた武器や器具の使用、高度な文明を下支えし得る生産力、時代に即した新たな社会体制の構築と効率化等々が相俟った総合力であろう。とは言え、戦いに於いては武器の優劣は決定的である。スペインのピサロが僅かな兵力でインカ帝国を滅ぼしたように、少数民族の多くが漢族との戦いに敗れて、僻地へ僻地へと移住していったと思われる。ともあれ、雲南の少数民族を訪ねると、米作りする村の風景、棟に千木を置いた家々のたたずまい、うだつのある軒下の壁、豆腐や米麹・発酵食品、風俗習慣や民具の数々など、遺伝子を共有する日本人の遠い祖先に出会ったような気がする民族に多々出会う。

遺伝子・DNA は生物の氏素性、進化の道筋を解き明かす鍵だと云われる。最近の研究によれば、アフリカで発生した人類の一部がインドに到達はしたが、高いヒマラヤ山脈に遮られて暖かな東南アジア方面に分散し、南太平洋の島々にも渡った。



朝日新聞の記事より

アジア太平洋地域の約 70 民族・集団の約 2000 人の DNA を分析した結果、タイ、カンボジア等の東南アジアから中国大陸を北上して日本人へと枝分かれしていった、遺伝学的な系統が明らかになったと言う。

一方では、中国東北から朝鮮半島を経由して日本に至ったとする説もある。いずれにしても、日本人のルーツが東南アジアや中国南部と深い関係があることは明らかである。古今東西、地域や時代を問わず、安定した暮らしをしている者は、一部の好奇心溢れる者や冒険心のある者以外は、己の権益を投げ捨ててまで未知の旅に出る者はいない。戦いに敗れた者、政争で権力の座から滑り落ちた者、豊かな土地から追われた者等々、追い落とされた者達が新天地を求めて小舟で命がけの旅にでかけたのであろう。何世代にもわたってこのようなことが繰り返され、島伝いに運よく日本にまで辿り着いた複数の民族が、今の日本人の祖先となったのであろう。

## 9. 奔流 中国

都市では、かつては自転車の洪水だった。今はオートバイやスクーターと自動車の洪水である。平坦な都市では、音も無く静かに走る電動スクーターも数多く走っている。車が増えたので、街中の幹線道路では車道とバイク・スクーター・自転車道と歩道の三つがきちんと分けられて、日本のように混在して走ることはない。

辺境の雲南でも高速道路の建設が盛んで、飛行機の窓からも山野を削って何処までも続く工事道の道が見える。蒙自から弥勒の町に向かう途中、一般道路でトラックとトレーラーの大きな事故に遭遇して3時間余り通行止めとなったが、物資運搬中の大型車が延々と連なるのを見ると、高速道路の必要性が頷かれる。

昔の道路は川沿いに、或いは山のひだを縫って峠を上り下りするが、山々の稜線を突き抜けて一気に走り抜ける、高規格の山岳高速道路を短期間に建設しうる技術と経済力もある。

都市近郊の高速道路の両側には、幅広い樹林帯を設けて環境に配慮するだけでなく、中央分離帯や幹線道路にも花木などを植えて美化する余裕も出てきたようだ。

他方、雲南省南部でも、過伐や行き過ぎた開墾によって荒廃した山野に「退耕還林」政策として、ユーカリノキやマツ、ビヤクシン類を至る所で植林して、治山治水に努力している様子が伺える。

中国は天然資源も豊かで、石油、石炭をはじめ、多くの鉱物資源がある。雲南省には石灰岩は無尽蔵に近く、錫の一大産地でもある。工業を下支えする職人集団も各地に健在で、沿海部の諸都市等には先端技術を習得した技術集団が無数にいて、今や貿易額や外貨準備高、GDPも日本を抜いて世界第二となった。

2010年には、上海での万博開催を目指して、市内の再開発や建設ラッシュが進行中である。浦東空港での乗り継ぎ時間を利用して、市内までリニアモーターカーに乗ったら、時速400km以上で突っ走り、日本の新幹線の比ではないのに驚いた。

現在、米国発の世界的不況を尻目に、年率8%の経済成長を目指す勢いである。かつての「眠れる獅子」が、今や奔流から躍り上がり勢いの「龍」になりそうである。商売上手の漢族は、国内はもとより、世界各地でも華僑として経済的手腕を発揮して財を成した者が多い。しかし、13億5000万人の人口と多くの少数民族、広く変化に富む国土と複雑多様な社会など、国内的には実に多くの問題をかかえている。

経済的格差も広がりこそすれ、縮めるのは容易なことではないだろう。資本主義的な経済システムと貧富の差、この現実と共産主義の理念とをどのように摺り合わせていくのか、政治家の手腕と舵取りが待ったなしに試されている。

### 後書きに代えて

旅は若い時にするものだ。年取ってからの見聞では、個人的な自己満足になりやすく、お世話になった社会へ還元する機会も少なく、冥土への土産話になるだけである。

明治4年(1871年)に維新政府は、政権の基盤さえ未だ固まらないのに、なけなしの大金をはたいて、留学生も含む100余人の岩倉使節団を欧米に1年10ヶ月間も派遣した。不平等条約改正の予備交渉も成果なく帰国したので、色々と批判され政府内でのきしみも生じた。しかし、欧米諸国の先進的な文明とその実態を目の当たりにして、使節団の誰もが強烈な印象を受けたことは間違いない。生涯忘れえぬこの経験が、その後の彼等の生き方、物の見方、考え方に大きく影響したことは想像に難くない。明治政府の文明開化政策も一段と加速された。また、留学生達も帰国後は各界のさまざまな分野で活躍し、この文明開化に大きく貢献したのである。

「好奇心と未知との遭遇」これが人類が進歩・発展してきた原動力なのだろう。

以上